演劇俳優の練習中の様子の観察
—観察から見える熟達化と今後の研究への提言—
Observation of Actors while Rehearsal
—Observed Expertise and Suggestions for Future Studies—

安藤花恵[1]，子安増生[2]
Hanae Ando, Masuo Koyasu

[1] 九州国際大学，[2] 京都大学
[1] Kyushu International University, [2] Kyoto University
[1] h-andou@law.kiu.ac.jp

Abstract

We observed actors with various length of acting experience while rehearsal. Novice actors practiced using a mirror more frequently than intermediate and junior expert actors, probably because they lacked ability to monitor their own performance. Moreover, they seemed not to evaluate or change their performance. As a function of the levels of expertise, actors acquire abilities to monitor, evaluate, and change their own performance all by themselves, and to investigate such expertise, analysis of rehearsal is suitable.

Keywords — expertise, actors, rehearsal

ある技能を習得しようと練習をおこなうとき，ただやみくもに遂行を繰り返しても，技能の熟達は果たせない．練習中にパフォーマンスを改善していくプロセスは，自身の遂行を 1）客観視，2）評価，3）修正という 3 つの過程を経ると考えられる．学習者は練習中，自分が遂行したパフォーマンスを客観視して正しく把握し，パフォーマンスのどこが悪いか評価し，それをもとにパフォーマンスを改善する，という活動を繰り返さなければならないのである．本研究では，さまざまな経験の長さを持つ演劇俳優の練習中の様子を観察し，練習中のこれらの活動にどのような熟達差が見られるのか確認した．

方法

被験者　演劇経験 1 年以下の初心者群, 経験 1～5 年の中間群，経験 5 年以上の準熟達者群，それぞれ 12 名（男性 6 名，女性 6 名），計 36 名の演劇俳優の練習の様子を観察した．この 3 群の俳優たちの練習後の演技は，3 群それぞれうまさに差があると評定されている（Ando & Koyasu, 2008）．

方法　セリフが一言だけの短い脚本を 4 種類用意し，それぞれについて，1 分間の練習の後に演技をおこなうということを 3 回ずつ繰り返した．計 12 分の練習時間中の様子をビデオ撮影し，観察をおこなった．

結果と考察 1　—客観視—

練習中は横に鏡が置いてあり，自分の演技を鏡で確認できる状態であった． 熟達の過程で，自らのパフォーマンスを客観視できるようになることは非常に重要であり，これまでにも演劇（Ando, 2007），日本舞踊（生田, 1987），ピアノ演奏（Oura & Hatano, 2001）などでこのことが論じられてきている．しかし，自らのパフォーマンスを完全にモニタリングできるようになることは簡単なことではない．バレーなどの舞踊や演劇の練習場が鏡張りになっていることが多いのは，このためである．そこで，俳優が練習中に鏡をどの程度使っているのかを観察した．

練習中にセリフを発した回数のうち，鏡を見ながら練習した回数と，鏡を見ずに練習した回数の割合を示した図が Figure 1 である．ちなみに 12 分の練習時間で一度もセリフを発して練習をおこなわなかった被験者（初心者群 3 名, 中間群 2 名，準熟達者群 4 名）のデータは除いてある．

鏡を見ながらセリフを発した割合について，熟達度（初心者，中間，準熟達者）を被験者間要因とした分散分析をおこなったところ，熟達度の主効果が有意であり（$F(2,24)=4.912$, $p<.05$），中間・

準熟達者群よりも初心者の方が鏡を見て練習をした回数が多いということが明らかになった．自己モニタリング能力に乏しい初心者は，練習をおこなっても自分の演技の良し悪しを自分では判断できず，そのために鏡を使用していたと考えられる．一方経験が長くなると，鏡がなくても自分で自分の演技を客観視できるため，鏡を見ながら練習することが減るのではないかと考えられる．

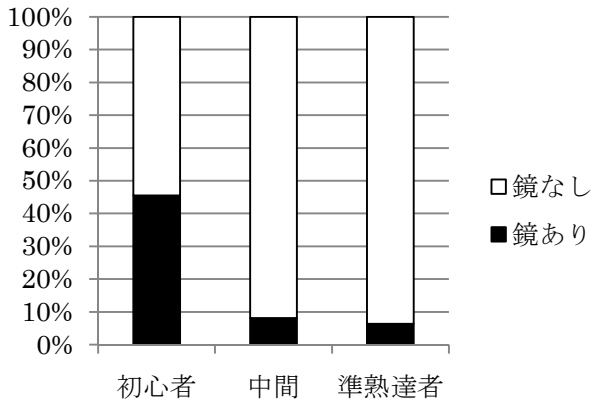

Figure 1. 練習中の鏡の使用の有無

また，セリフを発さずに鏡を見ながら表情のみを練習している様子もうかがえたため，鏡を見ている時間の長さも測定した（Table 1）．

Table.1 1 分間の練習中に鏡を見た時間（秒）

	初心者	中間	準熟達者
鏡を見た時間	9.21	3.52	1.50

熟達度を被験者間要因とした分散分析の結果，初心者の方が鏡を見る時間が長いということは統計的に確認されなかった(p=.118)．本研究においては，練習の場に実験者が同席していたため，まったく練習をおこなわない被験者が存在したり，練習をおこなった被験者の中にも，小声で控え目に練習をしていた被験者がいるなど，練習をしにくい状況であったと考えられる．実験者が同席せず，被験者が普段通りに自由に練習できる状況を用意すれば，より良いデータが得られるであろう．

結果と考察 2　―評価と修正―

初心者の中には，セリフを言い終わった直後に間髪いれずにまたすぐにセリフを発するなど，練習中に何度もやみくもにセリフを繰り返し，特にセリフの言い方に変化が見受けられない被験者が存在した．一方準熟達者になると，一度セリフを言ったあとにしばらく考える時間があり，次に発するセリフの言い方は，その前の言い方から大きく変化しているという場面が多く観察された．初心者の中には，そもそも練習中に自らの演技の評価や修正をあまりおこなおうとしていない者がいる可能性が考えられる．

総合考察

自らのパフォーマンスを客観視し，評価し，改善するという能力は，熟達していく上で非常に重要なものである．練習の様子を観察することで，初心者はおそらく客観視の能力が乏しいために，練習中に鏡を多用することが明らかになった．自己モニタリング能力を補う手段として鏡が有効であると考えられるが，鏡の使用の有無によってどの程度初心者の演技に差が出てくるのかや，経験の長さによって鏡の使い方に違いがあるのかなど，今後さらなる検討が必要である．また，初心者の中には練習によって演技を改善できていない者がいる可能性も明らかになった．本研究では探索的に観察をおこなったが，実験者が同席せずにより普段通りに練習できる環境を作るなど，より統制された研究をおこなえば，「練習」の現場からは技能の熟達について多くのことが明らかになる可能性があると言えるだろう．

引用文献

[1] Ando, H. (2007) Expertise of actors: Three viewpoints in acting. *Psychologia*, **50**, 5-14.

[2] Ando, H., & Koyasu, M. (2008) Differences between acting as if one is experiencing pain and acting as if one is pretending to have pain among actors at three expertise levels. In S. Itakura, & K. Fujita (Eds). *Origins of the social mind*. Springer. pp.123-140.

[3] 生田久美子 “わざ”から知る．東京大学出版会．

[4] Oura, Y., & Hatano, G. (2001) The constitution of general and specific mental models of other people. *Human Development*, **44**, 144-159.